

## アンモナイトセンター

三枝亮

三枝ミキ

的場サキエ（三枝亮の叔母）

### ●アンモナイトセンター

大きな空間。発掘現場の周囲を階段やスロープで囲んでいる施設。

中央には大きな岩場ありそれを見下ろす。

亮とミキがゆっくりと歩きながら展示を眺めている。

亮が足を止めて

カードの文字を読む

亮 「・・・アナ、ゴー・・・ドリ・・・セラス・・・」

亮 「アンモナイトの破片20」

少し歩く。またプラカードを読む。

亮 「アナゴー・・・ドリセラス」

追いついたミキもカードの文字を読む。

ミキ 「アナゴードリセラス・・・」

歩き始める亮。ミキも歩き始める。

また足を止める亮。プラカードを読む。

亮 「・・・アナゴードリセラス」

ミキは亮を追い越して先に進む。

足を止めてプラカードを読む。

ミキ 「・・・アナゴードリセラス」

亮も歩き始める。また足を止め別のカードを読む

亮 「アナゴードリセラス・・・」

亮 「アナゴードリセラスばかりだな」

ミキ 「なに？アナゴードリセラスって」  
亮 「・・・アンモナイトじゃないか？」  
ミキ 「アンモナイトのアナゴードリセラス？」  
亮 「アンモナイトセンターだからな。アンモナイトだろ」

歩き始める二人

ミキ 「私たちが知ってるアンモナイトってアナゴードリセラスなのかな」  
亮 「私たちが知ってる？」  
ミキ 「ほら。なんか絵でよく見るやつ。あ、また。アナゴードリセラス」  
亮 「ああ。どうだろ。・・・破片じゃわかんないな」

歩く  
カードを読む

亮 「・・・メソプ・・・ゾシア？」  
ミキ 「ソじゃなくてソじゃない？」  
亮 「ん」  
ミキ 「メソプ・・・ゾシア」  
亮 「ああ。メソプゾシアか」  
ミキ 「アナゴじゃないやつが出てきたね。やっと」  
亮 「出てきたな」

歩きながら展示を眺める二人。

ミキ 「ここって発掘の現場を再現したのかな」  
亮 「どうだろ・・・発掘現場をそのまま建物で覆ったんじゃないか」  
ミキ 「ふーん・・・」  
ミキ 「じゃここ海だったってこと？」  
亮 「そうなんじゃない。だいたい海だろ。昔は」

ミキ 「そうか」  
亮 「そうだよ。昔は海なんだよ。どこも」  
ミキ 「確かに。・・・昔は海だったってよく言うよね」  
ミキ 「んー。そうかも」  
亮 「・・・どうしたの」

ミキ 「もっと疑ったほうがいいのか」  
亮 「昔は海だったことを？」  
ミキ 「うん。私今まで、昔は海だったって言われたら、そうか海だったかって、疑いもしないで生きてきたけど、もうちょっと考えたほうがいいね」  
亮 「昔は海だったことを？」  
亮 「・・・海だったからアンモナイトとか出てくるんだろ」  
ミキ 「うん。もちろん疑ったうえで、納得したら信じるよ。鵜呑みにしないってこと」

ミキ 「出た。アナゴードリセラス」

通路脇のショーケースにある展示を見るミキ。

ミキ 「あ。ねえ。破片じゃないやつあるよ」

亮 「・・・本物？」

ミキ 「わかんない。・・・本物じゃない」

ミキ 「大きんだねー。メソプゾシアは」

亮 「アナゴードリセラスは小物だな」

ミキ 「なんだ小物なのかアナゴードリセラス。よくとれるわけだ」

亮 「ゴウドリセラス・・・」

ミキ 「なに。あたらしいやつ？」

亮 「何だあたらしいやつって。何万年前だと思ってるんだ」

ミキ 「そうだよ。うちのほうが相当ペーペーだよ」

亮 「そうだよ。・・・超先輩だよ」

ミキ 「そうだね。超先輩だ。さん付けだね。アナゴさん、メソプさんだね」

次のショーケースを見る亮。ついてくるミキ。

ミキ 「あ。またあたらしい先輩？」

亮 「ヤベイセラス・・・」

ミキ 「ヤベイさん、初めまして」

亮 「ホレステリア」

ミキ 「ホレスさん、よろしくです」

亮 「エゾイテス」

ミキ 「エゾイさん、お疲れさまです」

亮 「フカフェイテス」

ミキ 「フカフェイさん、・・・恐縮です」

亮 「ユーポトリ・・・ん？ユーポストリ・・・コラセラス？・・・ユーポストリ・・・コセラス」

ミキ 「ユーポストリコセラス・・・」

亮 「グリップ型の殻を持つ・・・異常巻きアンモナイト？」

ミキ 「異常巻き？」

ミキ 「ユーポスさんが？」

亮 「うん。ユーポストリコセラスは異常巻きアンモナイトらしい」

ミキ 「なに？異常巻きって」

亮 「・・・異常な巻き方を・・・してるんじゃないか」

ミキ 「異常な巻き方」

亮 「これかな（展示のイラストを指し）」

ミキ 「あー」

ミキ 「まあ。ちょっとトリッキーな感じはするけど。ユーポス先輩」

他のショーケースの説明を見るミキ

ミキ 「これは平巻きっていうのか」

亮 「ああ。よくみるアンモナイトは、平巻きなんだな」

ミキ 「うん。平巻き（正常巻き）って書いてある」

亮 「正常巻き？」

亮 「そうか。これが正常巻きなのか」

ミキ 「ユーポスさんは、なにをもって異常巻きなんて呼ばれる羽目になったのかな」

亮 「他がだいたい平巻きだったからだろ」

ミキ 「異常巻きが大多数を占めていたら、異常巻きなんて言われなかったんでしょ」

亮 「まあ。そうかも」

説明のカードを読んでいる亮

亮 「そうか。なるほど。昔は正常巻きって呼んでたけど、・・・いろんなのが発掘されるようになったから、今は平巻きって言い方に変わったらしい」

ミキ 「異常巻きは？」

亮 「異常巻きは・・・異常巻きだな」

ミキ 「異常巻きは据え置きなのね」

### ●喫茶店

三枝亮と三枝ミキが並んで座っている。

迎えに的場サキエが座っている。

サキエ 「三島さんとかね。娘さん東京から戻ったみたい」

亮 「そうなんだ」

サキエ 「ほら、知恵ちゃん。あんたと同じ年の。お米屋さんの」

亮 「そうだっけ」

サキエ 「そうよ。学年一緒だったでしょ。子供の時遊んだことあったでしょ」

亮 「そうか。そうだったかな」

サキエ 「そうよ」

サキエ 「この子そういうところあるから。大変でしょミキさん」

ミキ 「え」

サキエ 「なんていうか。ほら。情が薄いつていうか」

ミキ 「ああ。亮くんですか。そうですかね」

サキエ 「そう。それで知恵ちゃんがね。(ミキに)この先のお米屋さんの子なんだけど。東京でペットショップやってたとかで、それやめて戻ってきたみたいでね」

ミキ 「ええ」

サキエ 「三島さんも最近お店立たなくなってたじゃない。足のほうが良くなって。それでいまは知恵ちゃんがお店のほう手伝ってるんだけど。それがね。・・半年くらい前かな。ペット用品売り始めたのよ」

ミキ 「お米屋さんですか」

サキエ 「そう」

サキエ 「最初はリード？あの首輪とか。そんなんだったんだけど。だんだんね。だんだん増えてきて」

サキエ 「いまはもう、お店の半分はペット用品」

ミキ 「へえ」

ミキ 「じゃあ今はお米とペット用品のお店なんですね」

サキエ 「そう。そうなの。どうなの？って私は思うけど」

サキエ 「だってお米の袋の横にペットのトイレの砂、置いたりするの」

サキエ 「どうなのかしらね」

ミキ 「ああ」

サキエ 「私はね。え？てなっちゃって。それ見て」

サキエ 「袋詰めの。トイレの砂わかる？」

ミキ 「ああ。はい」

サキエ 「それがお米の袋と並んで売ってるの」

サキエ 「どうなのかしら」

ミキ 「ああ。それは確かに」

サキエ 「そうでしょ。そうよね。すみませんお水いいですか？(店員に)」

店員が水を汲みに来る。タバコに火をつけるサキエ

サキエ 「普通はね。もうちょっと別にするわよね。せめて置く場所くらいわね」

ミキ 「そうですね。似てますしね。袋のかたちも」

サキエ 「そうよ。そうなの。似てるじゃない。え？てなっちゃって私。それ並べる？って」

サキエ 「並べる？コシヒカリとかあきたこまちの横に、トイレの砂」

ミキ 「ああ。確かに」

サキエ 「あ。ごめんなさい。そっか(タバコの火を消し、煙を扇ぐ)」

ミキ 「あ。いえ」

サキエ 「ミキさんいま何ヶ月なんだっけ」

ミキ 「あ。もう5ヶ月です」

サキエ 「そっか。それじゃあもう」

ミキ 「ええ。だいぶ落ち着いてきて」

亮 「サキエおばさん・・・」

サキエ 「え」  
亮 「おじいちゃんとはあちゃんの骨だけど、明日受け取りに来るから。用意だけしといて」

サキエ 「うん。そうね」

サキエ 「あんた今日どこ泊まるの？」  
亮 「うちら今日は、駅前のシティホテル取ったから」  
サキエ 「どこ？第一ホテル？サンシティ？」  
亮 「第一ホテル」  
サキエ 「そう」  
サキエ 「あ、明日、午後でいい？私早番なの」  
亮 「うん。わかった」

亮 「じゃあ。行くよ」

サキエ 明細を見ようとして

亮 「いいよ。払っとく」  
サキエ 「そう。ありがと」  
ミキ 「あ。じゃあまた明日」  
サキエ 「ミキさんありがとね」  
ミキ 「はい」

亮とミキは会計を済ませ喫茶店を出て行く  
車に乗り込む。  
車を走らせる。

### ●車の中

ミキ 「いいの？」  
亮 「何が？」  
ミキ 「お家のほうは行かなくて」  
亮 「いいよ」

亮 「いいよっていうか。・・・いいんだよ」  
亮 「・・・足の踏み場ないから。どこで寝てんのかわかんないくらい」  
ミキ 「そうなんだ」  
ミキ 「そんなすごいんだ」  
亮 「うん」

亮 「子供の頃は夏休みのたびに帰ってたんだ」  
亮 「もとはじいちゃんの家だったからさ」  
ミキ 「そっか」

亮 「結構くるもんがあるんだよ」  
亮 「知ってる家が・・・じいちゃんの家がゴミ屋敷みたくなってるの」

亮 「俺、情薄いの？」  
ミキ 「え？」  
亮 「俺って情が薄いのかな」  
亮 「サキエおばさん言ってたろ」  
ミキ 「あー」  
ミキ 「んー。どうだろ」  
ミキ 「でもお墓立てるために骨を取りに来たんだから。情が薄いってことないんじゃない」

亮 「情が薄いってどういう状態？」  
ミキ 「状態？」

亮 「薄いとか厚いとかなのかな？・・・情って」  
亮 「平面なのかな？情って。・・・厚みで測るのものなの？」  
ミキ 「ほんとだね。平面なのかね。厚いとか薄いとか」

ミキ 「でも。なんか。そういう風に見えなかった」  
亮 「そういう風って？」  
ミキ 「おばさん。明るい人だったし」  
ミキ 「なんか。家がそういうことになってるようには見えないっていうか」  
亮 「よくしゃべる人だから。・・・昔からそうだったけど」

ミキ 「ペットのトイレの砂とお米並んでるのは変だよな」  
亮 「・・・」  
ミキ 「変っていうか。それは確かになって思った」  
ミキ 「そういう感覚はあってもゴミ屋敷になるものなんだね」  
亮 「わかんないね。話すと昔のまんまだし。何が普通の感覚で、どっからあれなのか」

亮 「ばあちゃんの介護必要だからってサキエおばさんが住むようになって。で、ばあちゃん亡くなってすぐくらいかな。旦那さんの建築事務所が潰れて、その事務所のもの全部運び込まれて」  
ミキ 「そっか。旦那さんは？」  
亮 「そのあとしばらくして旦那さんがほぼ蒸発したみたいになっちゃって。連絡取れなくなって」  
亮 「そっからどンドンああなって」

ミキ 「お墓ってどうするの？・・・」  
亮 「うん。親父と話して。うちの実家の方で。親父もそっちの方が管理しやすいだろうって」  
ミキ 「おばさんは？納得してるの？」  
亮 「もう六年経ってるからさ。じいちゃんたち亡くなって」  
亮 「もうこっちで建てるしかないんだよ」

ミキ 「それって、三枝家のお墓だよ」  
亮 「そうだよ」

ミキ 「ということは。それって。ゆくゆくは私たちも入るお墓なんだね」

亮 「・・・うん。まあ。そうかな」

ミキ 「えらいね」

亮 「・・・何が？」

ミキ 「パパえらいね（お腹に）」

ミキ 「パパお墓建てるって。すごいね。なんかすごいね（お腹に）」

亮 「墓建てるのと、父親になるのが同時にくるとは思ってたな」

小さなジップロックのような袋を取り出して眺めるミキ

亮 「・・・何が？」

ミキ 「もらったの。アンモナイトセンターで。出るとき職員の人に、どうぞって」

亮 「そうなんだ。・・・何の欠片？」

ミキ 「サメの歯」

亮 「・・・サメの歯？・・・へえ。あそこで発掘されたやつ？」

ミキ 「ううん。違うみたい」

亮 「違うの？」

ミキ 「なんか。モロッコで発掘されたやつだって言ってた」

亮 「モロッコで？発掘されたサメの歯？・・・もらったの？」

亮 「アンモナイトセンターで？」

ミキ 「うん」

亮 「関係あんの？」

ミキ 「まあ直接の関係はないと思うけど」

亮 「そんなもんもらうなよ」

ミキ 「いいじゃない」

ミキ 「記念になるじゃない」

亮 「なんの記念だよ」

ミキ 「おじいさんとおばあさんの骨を取りに来たときの、サメの歯だねって。後々見て振り返るんだよ」



ミキ 「モロッコのサメの歯だよー（お腹に）」

亮 「そういうのがたまりたまつてあなんだよ」

ミキ 「ゴミじゃないんだよ」

亮 「ん？」

ミキ 「自分にとっては」

ミキ 「テレビとかドキュメンタリーでしか見たことないけど。本人は誰もゴミだって思っ  
なさそう」

ミキ 「迷惑かけちゃうのはあれなんだけどさ、ゴミじゃないんだよ」

ミキ 「自分がゴミじゃないと思ってるものを、周りにゴミだって言われるのつらいね」

ミキ 「ユーポス先輩もそうじゃない」

亮 「ユーポス先輩？」

ミキ 「何だっけ。ユーポス・・トリコセラス？」

亮 「ああ」

亮 「異常巻きの」

ミキ 「そうそう。鼻つまみ者の」

亮 「鼻つまみ者なの？ユーポス先輩？」

ミキ 「うん。イメージ」

ミキ 「環境とかいろいろあったんだろうけど、このほうが生きやすいなって思う巻き方に進  
化してたんでしょ」

ミキ 「ちょっと変わった巻き方に進化しただけなのにね」

亮 「異常だとは思ってないけどさ」

ミキ 「うん」

亮 「・・まあね。別に俺らが正常ってわけでもないし」

ミキ 「そうだね」

ミキ 「あ」

亮 「何？」

ミキ 「なんか今日うなぎ食べたい」

おわり